

平成21年5月20日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007年度—2008年度
 課題番号：19520296
 研究課題名（和文） <声>とテキストに関する比較総合的研究

研究課題名（英文） A comparative study of voice and text theory

研究代表者

高木 裕 (TAKAGI YUTAKA)
 新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
 研究者番号：60116944

研究成果の概要：

「声とテキストに関する比較総合的研究」グループは、フランスのボルドー第3大学との共同研究を推進し、平成19年度には、エリック・ブノワ教授による講演会を開催し、研究の打ち合わせを行った。平成20年度には、国際シンポジウムを開催し、フランスのボルドー第3大学の研究グループ「モデルニテ」から、エリック・ブノワ教授とドミニク・ジャラセ教授が参加し、共同研究の成果を確認した。最終的に研究成果を国内に問いかけるために、平成21年3月に、公開シンポジウム「声とテキスト論」を開催し、日本で声とテキストの問題をさまざまな角度から研究している明治学院大学の工藤進教授の基調講演とともに、同時に「<声>と身体の日本文学」と題して、ワークショップも開催し、日本文学をテーマにプロジェクトメンバーによる研究報告が行われ、活発な質疑応答があった。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,800,000 | 540,000 | 2,340,000 |
| 2008年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |

研究分野：フランス文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：声、テキスト、語り

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として、主として新潟大学人文学部の有志による研究会「シュンポ

シオン・ロマンティコン」(年3回)における研究発表(高木「ネルヴァルの詩空間と声」、番場「声—問題提起のために—ドストエフス

キーの場合、など)や、新潟大学人文学部研究プロジェクト「声とテキスト論」(代表:高木 裕)における研究発表(佐々木「エクリチュールにおける声の生成」など)が行われており、本研究の研究分担者のそれぞれの専門の立場から「テキストと声」に関する研究発表を行ってきた。また、同プロジェクトでは、2005年9月に、大学間の協定交流を生かし、フランスで<声>をめぐって著作活動をしているボルドー第3大学教授ドミニク・ラバテ氏を招待し、講演会を開催した(講演の原稿「声の詩学」の翻訳は、人文科学研究(新潟大学人文学部)第118輯「声とテキスト論」特集に掲載)。これまでテキスト論における<声>の問題へのアプローチはほとんど<声>の生成のメカニズムに関わる「言表」の諸問題としてとらえられてきたが、言表へのアプローチやナラトロジーの方法論とは異なる方法で、ドミニク・ラバテ氏は、言表の裂け目から現れる特異性に注目し、20世紀フランス小説の一つの特徴を剔出している。彼の講演は、21世紀の新たな文学理論、テキスト論の方向を指し示しているといえる。つづいて、日本フランス語・フランス文学会(2005年度秋期大会)のワークショップ「テキスト論の行方」(コーディネータ:高木)において、高木はラバテ氏の講演について紹介するとともに、「声と詩のテキスト」のテーマで発表を行った。さらに2006年9月に、高木は学内の国際交流基金により(調査・研究課題「<声>に関する文学理論の共同研究」)、ラバテ氏を代表とする研究グループ「モデルニテ」と研究交流し、ボルドー第3大学において講演(Le texte poétique et la voix)を行った。これにより、人文学部の研究プロジェクト「声とテキスト論」とボルドー第3大学の研究グループ「モデルニテ」との間で、共同研究の

基盤が形成され、国際シンポジウムの準備は整った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、テキストと声の関係という人間の表象の問題において中心に位置する問題でありながら、その重要性が十分には明らかにされていない問題を取り上げ、その意義を多角的な視点から明らかにしようとするものである。朗読の<声>とテキスト、間テキスト性、文体と声の生成におけるオートポイエーシス、テキストの変化と語り、告白/自白における声のメディア論的読解など、テキストの生成に関わる問題をさまざまな観点から考察することで、この問題の持つ地平を明らかにする。<声>というタームで何を指し示すのかは、文学批評のレベルでも、さまざまであり、一言で定義するのは難しいが、ジュネットのナラトロジーのような、ディスクールの理論、あるいは言表行為論に収まることができないものを含んでいることは確かであり、そこに「言表」「主体」「身体」というタームが分かちがたく絡み合っているのである。それゆえ、<声>について、ひとつまとまった理論的なものを構築することはその本質からして多くの困難に遭遇するであろうが、逆に理論によって絡めとることのできない問題点を丹念に拾い集め、追究し、むしろそれらの問題の所在をあまねく照らし出すことが重要であり、そこに本研究の独創性がある。日本とヨーロッパの古典から、19世紀の欧米の文学に至るまでを視野に入れ、多様な視点からこの問題に取り組み、本質的な問題点について、相互比較検討し、そこに現出する問題群を呈示することによって、新たなテキスト論研究の基盤としたいと考える。

3. 研究の方法

研究方法は、研究の朗読の〈声〉とテキスト、間テキスト性、文体と声の生成におけるオートポイエーシス、テキストの変化と語り、告白/自白における声のメディア論的読解、テキストの生成論など、さまざまな方法によるが、最終的には、〈声〉のテーマを通して、互いの方法論の検証を比較することになる。〈声〉というトポスから、テキストの「語り」を言語学的にアプローチすることから始まり、身体論に絡めて研究したり、古典のテキストの口承性を追究したり、あるいはテキスト内の社会的な言説を読み解いたり、さまざまなアプローチの仕方があるが、いずれにしても、言語の成立と、社会形成に〈声〉が果たしてきた歴史的な役割をできる限り明らかにしようとするものである。

4. 研究成果

(1) 国際シンポジウムの開催

本科研プロジェクト「声とテキスト論」は、新潟大学人文学部の交流協定校のフランスのボルドー第3大学の研究グループ「モデルニテ」と共同研究を開始し、フランスにおいて、文学テキストにおける〈声〉の研究の第一人者であるドミニク・ラバテをはじめとして、平成19年にはフランス近代詩の〈声〉の変容を研究するエリック・ブノワを、平成20年度にはエリック・ブノワとともに、フランス19世紀絵画の専門家であるドミニク・ジャラセを招待し、新潟大学19世紀研究所とともに国際シンポジウムを開催し、19世紀の再評価を軸に、モデルニテ概念の洗い直し、〈声〉の問題群と密接に関わるモデルニテの射程を再確認するに至った。

(2) 国内シンポジウムの開催（講演とワークショップ）平成21年3月に、公開シンポジウム「声とテキスト論」を開催した。
プログラム

①講演『失われた時を求めて』の声について

講演者 工藤 進氏（明治学院大学文学部）

②ワークショップ「声と感覚の日本文学」

○発表者 鈴木孝庸氏（新潟大学人文学部）「平曲の秘曲におけるテキストと音楽」

○発表者 廣部俊也氏（新潟大学人文学部）「嘶本と見立遊び」

○発表者 先田 進氏（新潟大学人文学部）『金閣寺』における見ることと聴くこと」

○発表者 佐々木充氏（新潟大学人文学部）「批評の声と学問の声—小林秀雄と吉川幸次郎」

③研究プロジェクト「声とテキスト論」の活動報告

報告者 高木 裕（新潟大学人文学部）

(3) 新潟大学人文学部紀要（人文科学研究）にプロジェクト特集を掲載（第124輯）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10件）

①佐々木 充、「『ハムレット』における想起の技法—ロレンス・オリヴィエ監督・主演の映画『ハムレット』（1948）」、「英文学会誌」（新潟大学英文学会）、30号、43～58頁、2007、査読無

②佐々木充、「シェークスピアはロマン派？—19世紀前半におけるシェークスピア—」、「19世紀学研究」、第3号、103-118頁、2009、査読有

③佐々木充、「小林秀雄の近代批評—誤訳とずらしの手法について—」、「人文科学研究（新潟大学）」、第124輯、75-104頁、2008、査読無

④番場俊、「『罪と罰』—メディア・リテラシーの練習問題—」、「すばる」、4月号、264-269

頁、2007、査読無

⑤番場 俊、スタヴローギンの告白?—『悪霊』論の手前、『ユリイカ』、39巻、111-117頁、2007、査読無

⑥鈴木孝庸、「平家物語巻第7のテキストと<曲節>」、人文科学研究(新潟大学)、第120輯、1-24頁、2007、査読無

⑦鈴木孝庸、「平曲<読物>のテキストと墨譜」、人文科学研究(新潟大学)、第122輯、1-31頁、2008、査読無

⑧鈴木孝庸、祇園精舎語りの秘曲性、人文科学研究(新潟大学)、第124輯、T 1~48頁、2008、査読無

⑨高木 裕、<Le Texte poétique et la voix>、人文科学研究(新潟大学)、第120輯、57-77頁、2007、査読無

⑩高木 裕、ネルヴァルの抒情の探究と<声>、人文科学研究(新潟大学)、第124輯、Y pp. 5~21、2008、査読無

[学会発表](計 2件)

①佐々木 充、「シェイクスピアはロマン派?—19世紀前半におけるシェイクスピア—」、19世紀学研究所第3回国際シンポジウム、2008年10月4日、新潟大学

②佐々木 充、「批評の声と学問の声—小林秀雄と吉川幸次郎—」、シンポジウム「声とテキスト論」、2009年3月21日、新潟大学

[図書](計 5件)

①高木 裕、松澤和宏(他)、右文書院、「これからの文学研究と思想の地平」2007、340頁(83-106頁)

②鈴木孝庸・楊夫高、高志書院、『平家物語と不思議』2009、総180頁(6~32頁、161~170頁)

③鈴木孝庸、知泉書院、『平曲と平家物語』、新潟大学人文学部研究叢書2、2007、全280頁

④平野幸彦、栗原隆(他)、東北大学出版、「英米文学—なぜいまどき文学なのか」、(『人文学の生まれるところ』2009 全359頁(281-297頁))

⑤番場俊、東北大学出版会、「表象文化論—イメージ/テキスト/身体の夢」(『人文学の生まれるところ』2009 全359頁(91-108頁))

6. 研究組織

(1)研究代表者

高木 裕 (TAKAGI YUTAKA)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：60116944

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

佐々木 充 (SASAKI MICHIRU)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：60105228

鈴木 孝庸 (SUZUKI TAKATSUNE)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：90143742

番場 俊 (BAMBA SATOSHI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：90303099

平野 幸彦 (HIRANO YUKIHIKO)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：20275001